

# ロータリー財団 100 周年を祝う

## ロータリー財団学友がロータリーへの恩返し ロータリー財団 100 周年記念シンポジウム開催

緒方貞子氏に

「ロータリー財団 100 周年学友世界人道奉仕賞」

今年度、ロータリー財団は 100 周年を迎えます。その時に、ロータリー財団学友としてどのような活動ができるのか、ロータリー財団学友にふさわしい 100 周年の祝い方はどのようなものなのか、学友たちはいろいろと考えました。それが、11 月 27 日、「ロータリー財団 100 周年記念シンポジウム」という形になって実を結びました。600 人という会場の収容人数に、「それだけの人が来てくれるのか」という事前の心配に反して、800 人余が参加。会場に入り切れない人たちのために、ロビーに大型ビジョンが用意されました。

主催は、日本ロータリー学友会です。同学友会は、日本の各地区にある学友会の連合体です。学友たちは、この日を迎えるために何度も打ち合わせを繰り返し、準備をしました。当日は、多くの学友が受付や案内など、さまざまな役割を果たしました。シンポジストは、海外の紛争地帯などで、難民の支援や紛争解決などの分野で活躍する財団学友たち。この日のために、忙しい仕事の合間を縫って帰国してくれました。

開会のあいさつで、同シンポジウム実行委員長の田中栄次郎氏は「日本では 1950 年に最初の国際親善奨学生を送り出しました。これまでに第 2 期生の緒方貞子氏をはじめ、数々の人道支援、難民支援に携わる学友を



国際社会に送り出しています。それらの学友たちの中から、世界で最も厳しい状況にある難民や紛争の地域から、シンポジストとして 5 人の学友が参加してくれました。このシンポジストからじかに話をお聞きいただき、過去 60 年余にわたる日本のロータリアンの営々とした財団への支援が、国際社会への貢献として結実しているということを知っていただきたいと思います」と述べました。

ジョン F. ジャーム国際ロータリー (R I) 会長は「ロータリー財団 100 周年を迎えるに当たり、このような素晴らしいシンポジウムを開催していただき感謝します。学友の方々の多くはまだロータリアンになっていません。ぜひロータリアンになって、奉仕をしていただきたいと思います。ロータリー財団を通して、いかに皆さ





まが人類のために奉仕をしているのか、今日、学友の方たちの発言から知っていただけたと思います」と話しました。

「ロータリー財団 100 周年学友世界人道奉仕賞」が、



緒方貞子氏

緒方貞子氏に授与される旨、ジャーム R I 会長から発表されました。残念ながら、この日出席予定の緒方貞子氏は、急きょ入った公務のために出席できませんでしたが、この日のシンポジストでもある国連事務次長補の中満泉氏が、代わりにクリスタルの盾を受け取り、

緒方氏から預かったメッセージを代読しました。

「このような特別な機会に、ロータリー財団 100 周年学友世界人道奉仕賞を頂戴しありがとうございました。国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) 在任中の 1996 年に、私はロータリー国際理解平和賞をいただきました。あれから 20 年を経て、再びこのような素晴らしい賞をいただき、ありがとうございます。1951 年、今から 65 年も前になりますが、私は日本で 2 人目のロータリーフェローとして、ワシントンのジョージタウン大学の修士課程で学びました。アメリカ留学中は、ロータリアンや留学生との交流を通じて奉仕の精神を学ぶとともに、戦後の貧しい時代であっただけに、広い視野と経験を得たことが感慨深く思い出されます。ロータリーの精神である『Service above Self 超我の奉仕』という言葉は私の心に深く浸透し、今に至るまで、私を導いていると感じています。現在、私たちは変化の激しい時代に生きています。以前にも増して複雑な世界だからこそ、一人ひとりのつながりが一層大切になります」

## 難民、紛争……

### 最前線の様子を報告

続いて、最前線で活動している 5 人が順番に、自らの経験や、自分が活動している地域の情勢について報告しました。

東京大学大学院博士課程在籍中の國枝美佳氏は、ユニセフの職員としてアフリカでポリオの予防接種の担当をしていた経験があります。「当時はナイジェリアでかなり多くのポリオのケースが出ていて、周辺国にポリオがかなり輸出されているような状況にありました。そんな中でいかにナイジェリアからの輸出を止め、また、各国への輸入を止めるかということに心を砕いていました。私の仕事は、各国、各地方、各都市でいかに実施されているかをフォローすることでした。2010～2012 年の



ことですが、当時は毎月キャンペーンをしていました。ポリオのケースは 99% なくなり、最後の 1% のところまで来ています。最後の 1% なので、周りにポリオのためにマヒを起こしている子どもがほとんどいない状態になっています。自分にとっては脅威ではなくなっているのです。ポリオ撲滅の成功が、自分たちの成功で首を絞めているところがありますが、最後の 1% に届くために、まだいろいろな努力を重ねている人がいます」と話しました。

そして『「なぜポリオだけ」という住民からの声が残って、ポリオだけでなく全体を見られるようになればという思いで、また学業に専念するというので、今、東京大学で勉強しています」と、自身の現在の状況についても報告しました。

金子由佳氏は、ロータリー平和フェローです。「在学時代、共に平和について学ぶことができ、とてもいい機会となりました。今でも、その仲間と連絡を取り合っています」と、ロータリー平和フェローとして学んだ感想を述べました。

彼女は現在、日本国際ボランティアセンター・エルサレム事務所現地代表として、パレスチナのガザ地区で働いていますが、この組織は 1993 年にパレスチナで活動を始め、現在はガザ地区で、子どもたちの栄養改善事業などを実施しています。

最初に、イスラエルとパレスチナの関係、情勢について紹介し、「今では中東の問題がシリアの難民問題に移行してヨーロッパにシリア難民が増えています。もともと中東の問題と言えばイスラエルとパレスチナの紛争でした。70 年近く紛争が続いていますが、紛争がなくなる理由は何なのか。一つには政治問題が絡んでいると思っています。人道支援だけでは解決することのできない問題がここには残っています」と中東問題の難



國枝美佳氏



金子由佳氏



しさについて話しました。

最後に「実は横浜西ロータリークラブの皆さんにグローバル補助金でご支援いただいて、現地にお越しいただくことになっています。パレスチナにはいっぱいニーズがありますので、興味のある方はご相談させていただければと思います」と付け加えました。

阿阪奈美氏は、UNHCRの職員として、タイのキャンナブリで働いています。彼女は、2年前まで働いていた南スーダンでの経験を紹介しました。



阿阪奈美氏

「南スーダンの今回の紛争は、政治的な利害の対立から始まりました。大統領と副大統領が袂を分かったことから始まったのですが、二人が違う民族だったので、徐々に民族対立になってしまい今に至っています。2013年12月15日、今の紛争が始まった日のことを忘れることはできません。紛争が始まると、まず自分たちの安全の確保をしなければいけません。その日、私は部下である2人の現地職員を出張させていました。私が出張に行かせてしまったために殺されてしまったかもしれないと思ったら、頭が真っ白になりました。幸いに2人とも無事でしたが、難民の方々、避難民の方々にもいろいろと人生があって、難民、避難民の数だけストーリーがありますが、今日は職員側、特に現地職員にもそれぞれストーリーがあるということをご理解いただけたら幸いです」と話しました。

UNHCRのタンザニア副代表を務めていた赤阪陽子氏は「勉強してきたことを今の仕事に生かしていること、興味のあることを仕事にさせていただいているということは、すごくうれしいことで、本当に幸せなことだと思います。財団奨学生だった1年間は、



赤阪陽子氏

国連職員になりたいという夢が目的が変わった時期でした。本当に大切な時間をいただいたと感謝しています」と振り返りました。

シリアで働いた経験もある彼女は「シリアはあれだけ世界から注目を浴びて、人道支援が必要だということは明らかですが、人道援助活動が速やかに行われていない、行うことができないのが現状です。2016年10月現在で国内避難民が610万人、援助を必要としている人が

1,350万人とされています。そのうちの約97万人が政府軍または反政府軍に包囲された地域において外部との接触がほとんどできない、すなわち人道援助を受けることができない状態です。人道援助は非政治的なものですが、政治的なことが私たちの援助活動にかなりの影響を与えています。また、政治的な解決がなければ、人道援助の可能性が続いていきます」と述べ、人道援助の課題について紹介しました。

中満泉氏は、「命を救うという緊急人道支援がかけがえのない国際協力の分野であることは今後も変わりません。しかし、今日、世の中が非常に変わってきていて、国際環境も激変してきています。ですから従来型の国際協力のやり方では、問題を解決することができなくなってきました。紛争の形や性質が変わってきていますから、国連そのものや国際社会が危機に対応するアプローチも適応させていかなければいけません」と、人道援助の在り方について紹介しました。

「グローバル・ピース・インデックス(世界平和度)というのがありますが、大変残念なことに2015年には統計上も低下したと言われています。一例として、テロ攻撃の犠牲者が2011年の段階では1万人以下だったものが2014年では3万人を超えてしまいました。紛争の期間そのもの



中満泉氏

が、いろいろな読み方があるのですが、7年から12年もかかります。UNHCRの統計によりますと、現在、世界で2億5,000万人の人々が、経済的・社会的理由、環境の激変、政治的もしくは紛争が理由で移動しています。その中で過去最多の6,500万人もの人々が、国外もしくは国内で避難民として逃避することを強制されています。そのうちの2,100万人が難民として国境を越え、そのうちの約半数が18歳未満、過半数が女性と子どもです。約1,000万人の人たちが無国籍です。無国籍であるということは、教育や保健といった基本的サービスにアクセスができない、正規の雇用を得ることができない、移動の自由を認められていないということです。難民・避難民の95%が開発途上国にいます」と、深刻化する世界情勢について報告しました。

一方で「ポジティブなことも起こっています。1つ目が『持続可能な開発目標』が国連で採択されたことです。2030年までに『極端な貧困や飢餓を撲滅する』『国家間や国内での格差や不平等を是正しましょう』『平和的な社会や制度をつくっていきましょう』といったこと



を目標としています。2つ目ですが、2015年5月にトルコ・イスタンブールで開催された世界人道サミットで緊急人道支援を短期的に、単にニーズを満たすだけでなく、ニーズそのものを減らしていく、ニーズを生み出しているような根本原因を、一致協力して解決していくやり方にアプローチそのものを変えていきましょう、ということになりました」と、最近の動きを紹介しました。

## ロータリアンに望むこと

その後のパネルディスカッションは、同じく財団学友で現在、NHK国際放送局ワールドニュース部編集長の榎原美樹氏の司会で進められ、国際情勢や支援の在り方について、意見が述べられました。

中満氏は「現場の状況は、国によって異なるものがあり、状況は刻一刻と変化していきますから、私たちがそれぞれ、非常にクリエイティブな創造性をもって物事に対応するようなスキルを持っていなければいけません。日本の社会は、ある意味、マニュアル社会のところがあって、想定していない事柄に対して新しい手法を試してみるという文化がないのかもしれませんが、国際機関の現場での活動は、それが最も必要とされます。日本の若い人々には、どんどん外国に出て、いろいろな所でいろいろなことを勉強して、経験して行ってほしいと思います。これからもロータリーからそういった機会を若い人に提供していただきたいと思います」と、若い人やロータリアンにメッセージを送りました。

國枝氏は「私は自分に投資してもらったと思っています。皆さんの期待通りの人的資本になったかどうかわかりませんが、夢を持っている若い人たちに引き続きどんどん投資をしていただきたいと思います」と話しました。

阿阪氏は「ロータリーの強みはネットワークの広さだと思います。私は奨学生としてイギリスに派遣された時に、地元のロータリークラブの方と交流する機会を与えていただきましたが、それがなければただ留学をただけ。私の取ったコースはほとんどが外国人でしたから、イギリス人の友達をつくる機会もなかったし、生活の様子を見せてもらう機会もなかったので、ロータリーの奨学金をもらっていて本当に良かったなと思います」と感謝の言葉を述べました。

司会の榎原氏が「私も最後にロータリアンの皆さまにお礼を言いたいと思います。奨学生として留学した当時は、ジャーナリストになろうと思っていたわけではなかったのですが、本物のジャーナリストが勉強しに来ている姿を見て、格好いいな、私もこういう人たちのようにな



れるのだろうか、とあって、帰国して大学を卒業して、NHKに勤めています。あの1年がなければ今の私はないと思います。70か国くらい取材に回って、今は日本に帰ってきて、国際放送で英語の放送を東京から世界



榎原美樹氏

に発信しています。日本がこういう国なんだとか、日本から見たアジアはこういうものなんだという放送を中心に仕事をしています。これは私にとって、日本への恩返し。ロータリアンの皆さんを含むこれまで支援していただいた皆さんに少しでもお返しができるような、日本からの情報発信を

していきたいと思っています」と、締めくくりました。

この日、参加したロータリアンは、ニュースでは知り得ない、現場の状況、国際情勢を知ることができたと思います。ロータリー財団の奨学生たちにとってロータリーとの出会いが人生の転換点になったように、学友たちの話がこれからのロータリー活動に影響を与えることになるかもしれません。何よりも、自分たちが支援してきた奨学生たちの頼もしい姿を目の当たりにして、ロータリー財団の意義を再認識したことでしょう。

どこかで紛争が起こったと聞いた時、難民の様子をニュースで見た時、そこにロータリー財団学友の姿を探すことになるかもしれません。広いと思っていた世界が狭く、遠いと思っていた国々が身近に感じられるようになったことと思います。

取材『友』編集長 二神 典子

